



Title	チャオプー：社（やしろ）
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/95074">https://hdl.handle.net/11094/95074</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## チャオプー：社（やしろ）

### Chaopuu : Shrine

赤木 攻\*

AKAGI Osamu

私は、「タイ学」に長年従事してきた。その過程で最も楽しかったのは「農村調査」であった。本格的に農村に入り込んだのは1980年ころからであり、もう40年も前のことになる。しかし、タイ東北部の一寒村に数年間継続して一定期間定着し、毎日村内を歩き回り人々と歓談した経験は、今でも脳裏に焼きついている。それまでは、タイ語文献資料を扱い中央政治や歴史の分野を中心に学んでいた私にとって、農村調査は異次元世界の訪問に近く、きわめて新鮮であった。

かねてから、タイ族の伝統的村落構造を調査したいと考えていた私にとって、中部と異なりタイの伝統的社會や文化が色濃く継承されている東北部訪問は願ってもないことであった。学生時代に、タイは「ルースな社会 Loosely Structured Social System」であるとか「華僑や大地主が支配する社会」と教え込まれていた私は、果たして国家社會の基底部分である農村がどのような社會構造を持つのか強い関心をもっていた。実際の調査村は、もちろんまだ電力は届いておらず、約100戸からなる高床式の伝統的家屋が道路により4列に分かれた形で立ち並ぶこじんまりした自然村（集村）であった。たしかに、全体的に調度品や家具それに書籍などの所有もきわめて少なく、約10戸の家にはしか便所がないなど貧困の印象はぬぐえなかった（ただ、滞在するうちに、村人の普通の生活に便所は必ずしも必要でないことが判明するなど、裕福ではないがそれなりの生活が維持されていることがよく理解できた）。

調査期間が長くなるにつれ、この村落が決して「ルースな社会」ではなく、「ほどほどのまとまり」をもっていることがわかってきた。村人の經濟生活も「ほどほど」であり、節日毎の祝祭や各種儀礼や行事が精神生活を「ほどほど」に保つ働きをしており、「ほどほど」の安寧な生活が営まれていることが明白となった。そしてきわめて重要な点として、この村落にもそれなりの經濟力を有する地主が存在するが、その經濟的・政治的影響力は少ないことも判明してきた。強引な搾取という言葉で表現されるような事態はほとんど生じていない。加えて、なにがしかの吸引力を有しているかと考えていた「寺院」も村人の生活と近接してはいるものの、そこはタム・ブン（功德）の場であり仏教の枠組みを越えるほどの（世俗的）力はなかった。

とすれば、この「ほどほどのまとまり」を村落にあたえているのはなにか。私は考え込んだのであった。

そこで、思いついたのは、村人との会話の中で時々出てきていた「チャオプー」と呼ばれる「社（やしろ）」の存在である（村落の東方部の片隅にある小さな林の中に鎮座するこの「社」は、ヨコ約1m、タテ約80cm、奥行約50cmの木製の箱を横に置き、オープンにしたヨコの一面を正面とし、さらにその箱の上部に切妻形のトタン屋根を三角部が正面になるよう乗せてある。そして、その箱の下部の4角に足柱を付し、箱部分の高さが約1.3mの高さになっている。かなり古びており、一部分は朽ちてきている。箱部分には、礼拝者が供えた線香と蠟燭、さらに菓子類、酒類を中心とした食べ物などが乱雑に並んでいる）。この見たところみずばらしい「チャオプー」こそが、村落全体または村人が抱える諸々の問題についてお伺いを立てる場であり、「社」と村人の間に介在し「通訳」の専門的役割を担っている「チャム（巫）」という者がいるというのだ。とりわけ、村落全体の利益に関わることで賛否が決まらない時には、「チャム」を通して「チャオプー」に判断を委ね、その宣告に村人は従わねばならないという慣習である。「チャオプー」およびその代理人である「チャム」こそがその村落の支配者であ

\* 大阪外国語大学名誉教授

り、絶対者であると納得した。そこで、可能な限り、歴代「チャム」の系譜を洗ってみて驚いたのは、そこに一つの家系がくっきりと浮かび上がってきたことである。しかもその家系はこの村落の「草分け」につながることを発見した。ある古老に「チャオプー」に祀られている礼拝の対象（神体）のイメージを描いてくれと頼んだところ、それは、「黒装束を纏い、杖を持った男性」であった。恐らくは、それこそが伝承されている「草分け」に違いないとびんと感じた。さらに、各世帯は1年に一度の儀礼で、世帯員数+飼育水牛数+同牛数の合計に等しい数の「人・水牛・牛結び」をバナナの葉で作り、「チャム」の家の前に用意された籠に入れる。「チャム」はそれを「チャオプー」に一人で持参し、村落と村人の繁栄と幸福を祈願する。つまり、「チャオプー」は、人および水牛・牛を成員とする村落全体の守護霊であるといえる。

しかも、調べてみると歴代の村落の政治を司っている村長も全員が「草分け」の系譜に属していることが判明した。つまり、この村落に「ほどほどのまとまり」を与えているのは「チャオプー」であり、その底に流れる祖先崇拜であるとの結論を得たのである。

この「チャオプー」が私に与えてくれた教訓は、土地所有や所得さらには人口などといった統計的計量数値による研究も重要であるが、そうではなく目には直接見えないが人間の意識や価値観または関係性（ネットワーク）の流れの中に宿っているものがいかに大切であり、そちらの方が物事全体のより正確な理解をもたらしてくれるということであった。この研究方向が、私の「地域研究＝タイ学」に大きな影響をもたらしたのは言うまでもない。

いかなる研究においても実証主義が重要であることは理解できるが、感覚、信仰、言語表現、「空気」など正確に数値化しにくいものこそより大事に扱わねばならないのではなかろうか。この研究方向を突き詰めていけば、とりわけ自然科学界で取り上げられることが多い「要素還元主義」と「ホーリズム」の問題につながっていくのかも知れない。